

# 25PB-pm155

## 添付文書における抗インフルエンザウイルス薬オセルタミビルと局所麻酔薬の副作用の類似性

○小野 秀樹<sup>1</sup>, 岡村 真彩<sup>1</sup>, 福島 章紘<sup>1</sup> (<sup>1</sup>武蔵野大薬)

オセルタミビル(Ose)はエチルエステルでありエステル型の局所麻酔薬(LA)と化学構造が似ている。我々はOseとLAがニコチン性アセチルコリン受容体チャネルを抑制して、マウス体温を下げ、ラット神経筋接合部伝達を抑制することを報告した(Onoら2008, 2013; Murakiら2015; Fukushimaら2015)。抗ウイルス作用があるOseのカルボン酸体はこれら薬理作用を持たない。OseとLAはドパミン神経系を賦活し、A型MAOを阻害することからも、OseとLAの薬理作用は類似する。本研究では、Oseを含む5つの抗インフルエンザウイルス薬と8つのLAにおける、主に興奮性の精神神経系副作用の類似性について、添付文書に基づき調査した。各薬物につき重大な副作用とその他の副作用の項目から、精神神経系副作用を抽出した。抗インフルエンザ薬では、Oseとアマンタジンの重大な副作用には「せん妄、幻覚、妄想、痙攣、意識障害」が掲載されていたが、他のノイラミニダーゼ阻害薬には、これらはいずれも掲載されていなかった。Oseについてはさらに「振戦」がその他の副作用に掲載されていた。5つのLAについては、「痙攣、意識障害、振戦」が重大な副作用に掲載され、LAのこれらの副作用はOseの副作用に含まれていた。なお、アマンタジンは抗インフルエンザ薬としてはM2チャネル遮断薬、抗パ薬としてはNMDA受容体チャネル遮断薬であり、ニコチン性アセチルコリン受容体チャネルを抑制することも知られている。治療薬ハンドブックの67薬物群の分類で、抗パ薬(ドパミン神経系賦活)、アシクロビル系の抗ウイルス薬およびインターフェロン系の肝疾患治療薬群においてのみ、Oseの重大な5副作用のうち3つ以上を含む複数の薬物が含まれていた。以上から、構造式と薬理作用に加えて、添付文書におけるOseとLAの重大な精神神経系副作用も類似していた。